

ドイツ語様相助動詞の意味研究におけるいくつかの問題

竹内, 義晴
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796161>

出版情報 : 言語科学. 20, pp.43-55, 1985-03-30. 九州大学教養部言語研究会
バージョン :
権利関係 :

ドイツ語様相助動詞の意味研究におけるいくつかの問題

竹 内 義 晴

0. 初めに。

ドイツ語の助動詞のうち、(1)にあげる七つは、その統語的なふるまいにおいて、動詞の不定形と結合する、という特性を共有している。

(1) dürfen, können, mögen, müssen, sollen, werden, wollen.

平叙文の主文において、これらの助動詞の今挙げた特性は、(2)に定式化される。

(2) X + 助動詞の定形 + Y + 動詞の不定形

(3)に挙げる、"werden"を除くこれらの助動詞は、伝統文法において、Modalverben または、modalverbs というカテゴリーに分類されてきた。

(3) dürfen, können, mögen, müssen, sollen, werden.

日本の学校文法ではこの術語に、ドイツ語においては、「話法の助動詞」、英語等では「法助動詞」という訳語をあてるのが普通であった。しかし、表題に書いたように、私はこの術語に様相助動詞という訳語をあてた。私の考えによれば、(3)にあげた助動詞の意味は、何らかの形で、

(Cresswell & Hughes 1968 が紹介しているような) 標準的な様相論理学でいう可能、又は、必然様相とかかわっている。この点において、「話法」とか、「法」という、あまりはつきりしない概念よりも、「様相」という概念の方が、この"modal"という語にはなじむではないだろうか。

Vater (1975)は、"werden"についても Modalverben の1つと考えるべきであると主張している。品詞論の原則に基づき、形態論上の特性を重視するならば、しかしこの主張には明らかに無理がある。ドイツ語の現在、過去の時制にみられるように、時制は動詞の活用によって表現される、という理由で助動詞"werden"を用いた表現に「未来」という時制カテゴリーを与えたくないように、助動詞"werden"は Modalverben のカテゴリーには入れにくい。何故ならば、(3)に挙げた助動詞群は、非常に足並みを揃えた変則的な活用を示すのに対し、"werden"は、別のタイプの変則的なふるまいを示すのである。

更に、(3)の動詞群についての、可能、または、必然様相とのかかわり、という点での私の考えが正しいならば、助動詞"werden"はその点でも、「様相助動詞」の仲間ではない。

しかし、「様相」という概念を、可能と必然とだけに限定せず、「時間の論理」を含む可能な多世界についての概念と考えれば、助動詞“werden”を用いた表現は「様相」を表現していることになる。Vater のように、“werden”を用いた表現が、何らかの「推量」を意味するにせよ、または、伝統的に考えられているように、何らかの「未来の時にかわること」を意味するにせよ、その表現は多世界にかかわる表現だからである。

(3)の助動詞群が形態論的にはっきりと特徴づけられているのと同様に、(2)に示した(1)の助動詞群の統語上の特性は、この広い意味での「様相」を意味する一連の表現を、やはり特徴づけているのかもしれない。(もっとも、この(2)で示された特性、または、これらの動詞群が、「動詞の不定形を従える時に、過去分詞形として、前綴りの“ge-”を伴わない」、という特性に注目するならば、“geben”, “heißen”, “lassen”, “sehen”等の動詞もこの様相助動詞の仲間として考慮に入なくてはならないことになる。助動詞という品詞に、この二つの統語・形態的な特性によって、ある種の特徴づけをすることは困難なのではないか、と私は考える。そもそも“werden”を助動詞というカテゴリーに分類していいものか、ということすら本当はあやしいのである。)

(1)群の助動詞を「広い意味での様相助動詞」とし、(2)群の可能、必然様相と何らかの形でかわりがあると私が考える助動詞を、「せまい意味での様相助動詞」としよう。

私は現在、様相助動詞の意味研究を進めているのであるが、専らこの「せまい意味での様相助動詞」に関心がむいている。様相助動詞の意味を、可能、および、必然様相、という観点から見直し、体系的に整理ができるのではないかと考えているのである。今後、本論では、この「せまい意味での様相助動詞」のことを様相助動詞と呼ぶことにする。

私の仮説はおよそ(4)であるが、本論では「様相助動詞の意味研究」の序論として、私の研究の構想を紹介したい(1., 2.および, 3.). また、この仮説についていくつかの検討を加え、問題点を明らかにしてゆくと共に、その解決の方向を探ることができればよいと思っている(4.).

- (4) 様相助動詞の意味は、知識、好み、意志、等の、コンテキスト(世界の集合)における可能、または、必然様相である。

1. 可能、および、必然様相

様相のかかっていない単純命題(5)に対し、可能命題を(6)、必然命題を(7)とする。

- (5) p
 (6) $\diamond p$
 (7) $\square p$

(6)、および、(7)の意味論的な解釈はそれぞれ、(6a)、および、(7a)である。また述語論理体系における存在命題(8)と全称命題(9)との間には(10)、および、(11)の関係が成り立つ。この(6a)、(7a)、および、(10)、(11)から通常の様相論理体系における可能命題と必然命題との間の関係(12)、(13)が導かれる。

(6a) $\Diamond p$ は p が少なくとも 1 つの世界において真である時, 真。

(7a) $\Box p$ は p がすべての世界において真である時, 真。

(8) $\exists x (F x)$

(9) $\forall x (F x)$

(10) $\forall x (F x) \equiv \neg \exists x (\neg F x)$

(11) $\exists x (F x) \equiv \neg \forall x (\neg F x)$

(12) $\Diamond p \equiv \neg \Box \neg p$

(13) $\Box p \equiv \neg \Diamond \neg p$

2. ドイツ語における様相表現としての様相助動詞をもちいた表現。

通常, 可能命題(6), および, 必然命題(7)に対応する自然言語の表現は, ドイツ語では, それぞれ, 形容詞を用いた(6b), および, (7b)とされる。更に, 文副詞を用いた表現(6c), および, (7c)が挙げられることもある。

(6b) Es ist möglich, daß p .

(7b) Es ist notwendig, daß p .

(6c) Möglicherweise p .

(7c) Notwendigerweise p .

そして更には, 様相助動詞を用いた表現, (6d), (6e), (6f), および(7d), (7e), (7f)も考えられる。

(6d) Es kann sein, daß p .

(6e) Es mag sein, daß p .

(6f) Es darf sein, daß p .

(7d) Es soll sein, daß p .

(7e) Es muß sein, daß p .

(7f) Es ist gewollt, daß p .

様相論理体系における様相命題(6), および, (7)に対して直接これらのドイツ語の様相助動詞を用いた表現, (6d)–(6f), 並びに, (7d)–(7f)が対応しているとは, (特に(7f)については,) 直観的にもいいがたい。しかし, ここで(14a)と(14b)から(19a)と(19b)までのそれぞれの対になっている例文を観察してみよう。

(14a) Es kann sein, daß Monika alkoholsüchtig ist.

(14b) Es soll nicht sein, daß Monika nicht alkoholsüchtig ist.

- (15a) Es mag sein, daß Monika alkohlsüchtig ist.
 (15b) Es muß nicht sein, daß Monika nicht alkohlsüchtig ist.
 (16a) Es darf sein, daß Monika alkohlsüchtig ist.
 (16b) Es ist nicht gewollt, daß Monika nicht alkohlsüchtig ist.
 (17a) Es soll sein, daß Monika alkohlsüchtig ist.
 (17b) Es kann nicht sein, daß Monika nicht alkohlsüchtig ist.
 (18a) Es muß sein, daß Monika alkohlsüchtig ist.
 (18b) Es mag nicht sein, daß Monika nicht alkohlsüchtig ist.
 (19a) Es ist gewollt, daß Monika alkohlsüchtig ist.
 (19b) Es darf nicht sein, daß Monika nicht alkohlsüchtig ist.

それぞれの対をなす例文の間には、およその等意関係が成り立っていることがわかる。つまり、(6d) – (6f), および (7d) – (7f) のそれぞれの様相助動詞を用いた表現は(12), (13)の様相論理体系における可能命題と必然命題との間の関係に類似のふるまいを示すようである。

- (20) Es kann sein, daß p.
 ≙ Es soll nicht sein, daß nicht p.
 (21) Es mag sein, daß p.
 ≙ Es muß nicht sein daß nicht p.
 (22) Es darf sein, daß p.
 ≙ Es ist nicht gewollt, daß nicht p.
 (23) Es soll sein, daß p.
 ≙ Es kann nicht sein, daß nicht p.
 (24) Es muß sein, daß p.
 ≙ es mag nicht sein, daß nicht p.
 (25) Es ist gewollt, daß p.
 ≙ Es darf nicht sein, daß nicht p.

このことは(6d) – (6f), および, (7d) – (7f) の, 様相助動詞を用いた表現が, 様相論理体系における可能様相, 又は, 必然様相を, 何らかの形で抱え込んでいる事を示唆しているのではないだろうか。

また, (6d) – (6f) に対応した表現(14a) – (16a)の表現のごくおおざっぱなパラフレーズは(6b)に対応する表現(26a)であり, (7d) – (7f)に対応した(17a) – (18a)のごくおおざっぱなパラフレーズは(7b)に対応する表現(26b)である。そして更に, (6d) – (6f), および, (7d) – (7f)の否定表現に対応する表現のごくおおざっぱなパラフレーズは, (27a)と(27b)であろう。

- (35) Es mag sein, daß → \diamond^P
 (36) Es muß sein, daß → \square^P
 (37) Es darf sein, daß → \diamond^I
 (38) Es ist gewollt, daß → \square^I
 (39) nicht → \neg

- (40) $\diamond^K p \equiv \neg \square^K \neg p$
 (41) $\diamond^P p \equiv \neg \square^P \neg p$
 (42) $\diamond^I p \equiv \neg \square^I \neg p$
 (43) $\square^K p \equiv \neg \diamond^K \neg p$
 (44) $\square^P p \equiv \neg \diamond^P \neg p$
 (45) $\square^I p \equiv \neg \diamond^I \neg p$

確かに、(6d)–(7f)のそれぞれの様相助動詞を用いた表現は、様相論理体系における、可能様相表現、および必然様相表現と直接対応している訳ではない。しかし、(28)–(30)のそれぞれの対の様相助動詞を用いた表現は、(40)–(45)をみるならば、はっきりと、様相論理タイプの体系を形づくっているらしいことがわかる。

これらの体系をそれぞれ、K, P, I と名付けるならば、各体系とその様相オペレーターは、(46)–(48)のように対応づけられる。

- (46) $K \longleftrightarrow \langle \diamond^K, \square^K \rangle$
 (47) $P \longleftrightarrow \langle \diamond^P, \square^P \rangle$
 (48) $I \longleftrightarrow \langle \diamond^I, \square^I \rangle$

通常の様相論理体系の定義域は「すべての可能な世界の集合」 W^U である。(28)–(30)のそれぞれの対の様相助動詞を用いた表現が、様相論理タイプの体系K, P, Iを形づくっているとすると、K, P, Iの定義域は、 W^U よりも小さな集合である、 W^U の部分集合 W^K , W^P , W^I である筈だ。

- (49) $W^K \subseteq W^U$
 (50) $W^P \subseteq W^U$
 (51) $W^I \subseteq W^U$

便宜上、私はここで、 W^K , W^P , W^I に「わかりやすい名前」をつける。しかしこの名前は、ラベル以上のなものでもないので、つまり哲学をするつもりはないので、考えすぎないでいただきたい。

- (51) W^K : 知識の世界の集合,

(52) W^P : 好みの世界の集合,

(54) W^I : 意志の世界の集合,

4. モデルについてのもう少し細かな議論

前章において私は、ドイツ語の様相助動詞のそれぞれに、コンテキスト W^K , W^P , W^I における可能様相, および, 必然様相としての意味を割り当てた。本章では特に, この3つのコンテキストの性質についてももう少し論議すると共に(4.1.), このモデルに対して予想されるいくつかの問題点についての解答を考えたい(4.2.). また, この私の提案が, 今後どのような方向で実証されるのかについて, 見通しを述べたい(4.3.). そして最後に, なぜ私がこのような提案をしたのかについて, 簡単に述べたい(4.4.).

4. 1. W^K , W^P , W^I の性質について

コンテキスト W^K , W^P , W^I はそれぞれ世界の集合であるが, コンテキスト W^X と W^Y の間に包含関係(55)がなりたつとする。この時, W^Y における可能命題

$\Diamond^Y p$ の真は当然 W^X における可能命題 $\Diamond^X p$ の真より推論されるはずである。また W^X における必然命題 $\Box^X p$ の真は W^Y における必然命題 $\Box^Y p$ の真より推論されるはずである。

$$(55) W^X \subseteq W^Y$$

$$(56) \Diamond^X p \rightarrow \Diamond^Y p$$

$$(57) \Box^Y p \rightarrow \Box^X p$$

それではここで, 可能様相にかかわる様相助動詞表現(58)–(60)を観察してみよう。

(58) Es kann sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt.

(59) Es mag sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt.

(60) Es darf sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt.

(58)が真の時, 必ず(59)や(60)が真であるということは, あまりありそうでない。しかし, (59)や(60)が真のとき, (58)が必ず真である, ということは, あるかもしれない。また, (59)が真である時に(60)が必ず真であるとか, (60)が真である時に(59)が必ず真であるということはない。このことは(61)–(66)の各組の文のそれぞれの意味上の整合性, 不整合性によっても, およそ理解できる。

(61) ? Es kann sein, daß Peter morgen nach

Paris fährt. Folglich mag das natürlich der Fall sein.

(62) ? Es kann sein, daß Peter morgen nach Paris fährt. Folglich darf das natürlich

der Fall sein.

- (63) Es mag sein, daß Peter morgen nach Paris fährt. Folglich kann das natürlich der Fall sein.
- (64) Es darf sein, daß Peter morgen nach Paris fährt. Folglich kann das natürlich der Fall sein.
- (65) ? Es mag sein, daß Peter morgen nach Paris fährt. Folglich darf das natürlich der Fall sein.
- (66) ? Es darf sein, daß Peter morgen nach Paris fährt. Folglich mag das natürlich der Fall sein.

可能様相にかかわる様相助動詞表現の間で推論関係が成り立ちそうなものは、形式的に示すならば、(67), (68)の2例である。

(67) $\diamond^P p \rightarrow \diamond^K p$

(68) $\diamond^I p \rightarrow \diamond^K p$

次に必然様相にかかわる様相助動詞表現(69)–(71)をながめてみる。

- (69) Es soll sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt.
- (70) Es muß sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt.
- (71) Es ist gewollt, daß der Peter morgen nach Paris fährt.

(69)が真のとき、必ず(70)や(71)が真であるということは、大いにありそうである。しかし、(70)や(71)が真の時に、(69)が必ず真であるということは、あまりありそうではない。また、(70)が真である時に(69)が必ず真であるとか、(69)が真である時に(70)が必ず真であるということはどうか。このことは(72)–(77)の各組の文のそれぞれの意味上の整合性、不整合性によっても、およそ理解できる。

- (72) Es soll sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt. Folglich muß das natürlich der Fall sein.
- (73) Es soll sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt. Folglich ist das natürlich gewollt der Fall.
- (74) ? Es muß sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt. Folglich soll das natürlich der Fall sein.
- (75) ? Es ist gewollt, daß der Peter morgen nach Paris fährt. Folglich soll das natürlich der Fall sein.
- (76) ? Es muß sein, daß der Peter morgen nach Paris fährt. Folglich ist das natürlich gewollt der Fall.

- (77) ? Es ist gewollt, daß der Peter morgen nach Paris fährt. Folglich muß das natürlich der Fall sein.

必然様相にかかわる様相助動詞表現の間で推論関係が成り立ちそうなのは、形式的に示すならば、(78), (79)の2例である。

$$(78) \quad \square^K p \rightarrow \square^P p$$

$$(79) \quad \square^K p \rightarrow \square^I p$$

つまり、コンテキスト W^K , W^P , W^I の間には(80)–(81)の包含関係があるようだ。

$$(80) \quad W^P \subseteq W^K$$

$$(81) \quad W^I \subseteq W^K$$

様相助動詞を用いた表現の間の推論関係から導き出せる、コンテキスト間の包含関係は、上の2つくらいのものであるが、このことについては、更に言語資料を収集、検討してみなければならないだろう。

コンテキスト W^K , W^P , W^I がそれぞれにどのような性質を備えているのかについても更に検討を加えてゆかなくてはならない。様相助動詞”können”と”sollen”, ”mögen”と”müssen”, そして”dürfen”と”wollen”の意味は、それぞれ、コンテキスト W^K , W^P , および, W^I における、可能様相と必然様相であるというのが私の仮説であった。それぞれのコンテキストとかわりをもつ、1組ずつの様相助動詞を用いた表現について、なんらかの共通の特性を挙げることができれば、その手がかりによって、そのコンテキストの性質を探るべくことができるだろう。また、そのことは、私の仮説にとって、強力な論拠となろう。

残念ながらここでは1つの事例を示唆することにとどめておく。

例えば、”mögen”と”müssen”は通常動作主を主語とする表現において、殊に否定に対して、奇妙なふるまいを示す。(83)によって否定されているのは様相助動詞”mögen”の内容ではなく、その支配を受ける動詞句の内容であり、(82)の内容の通常否定は(83)ではなく、形式主語の”es”を用いた(84)であろう。また、(85)の通常否定は(86)ではなく、(87)だといわれる。(86)において否定されるのは様相助動詞”müssen”の内容ではなくて、その支配を受ける動詞句の内容である。

(82) Barbara mag ihren armen Mann schlagen.

(83) Barbara mag ihren armen Mann nicht schlagen.

(84) Es mag nicht sein, daß Barbara ihren armen Mann schlägt.

(85) Barbara muß viel essen.

(86) Barbara muß nicht viel essen.

(87) Barbara braucht nicht viel zu essen.

これに対し、例えば、“können”や“sollen”を用いた表現(88)と(90)の否定、(89)と(91)では、様相助動詞の内容が否定されることができる。

- (88) Barbara kann ihren armen Mann schlagen.
- (89) Barbara kann ihren armen Mann nicht schlagen.
- (90) Barbara soll ihren armen Mann schlagen.
- (91) Barbara soll ihren armen Mann nicht schlagen.

このことは、コンテクスト W^P が、 W^K に対して、何らかのより強い制約を受けていることを示しているようである。そしてまた、このことは、 W^K と W^P との間の包含関係(80)にも対応している。

後に、4.2.でみるのだが、“sollen”をもちいた表現もまた、ある種の「非合理的な言語使用コンテクスト」においては、否定に対して“mögen”や“müssen”に似たふるまいを示す。このコンテクスト W^P を特徴づける制約も、おそらくは、このような、ある種の「非合理的な」性質のものなのであろう。

このような、それぞれのコンテクストにかかわる様相助動詞のそれぞれの対を特徴づける現象が、「条件」や「理由」についての表現との共起関係などにおいて、ある程度、見つけやすい気がするが、今後具体的な作業をしてゆかなくてはならない。

4. 2. いくつかの問題点について

そもそもことがらが自然言語の体系にかかわることであるから、前章において提起された仕事を実際にこなしてゆくことによって、私の仮説が相当程度に根拠づけられたとしても、当然、仮説の枠からはみ出ることがある筈である。例えば、“sollen”をもちいた否定表現、(92)は全く普通の表現であるが、否定されているのは“sollen”の内容ではなく、“sollen”に従えられた動詞句の内容である。

- (92) Du sollst nicht rauchen.

このような場合、この現象を説明するための言語使用にかかわるメカニズムが必要とされるだろうと私は考えている。“sollen”を用いた表現においても、この(92)においては、言語表現、が「命令」のような、言語使用のコンテクストに埋め込まれている、または、話者、あるいは、話者に代表される誰かの意向と、知的なコンテクストとが混同されているような、「非合理的な言語使用コンテクスト」に埋め込まれている。そして、このような場合には、様相にかかる否定が文中に直接入り込むことがブロックされるのであろう。(もっとも、何故そういうことが起きるのかということは、説明されなくてはいけないことなのであるが。)

このように文が言語使用のコンテクストに埋め込まれた場合の事例として、さまざまな、一見、私の提案とはそぐわないような現象が説明されてゆくだらうと私は考える。

伝統文法においては、それぞれの様相助動詞に、ある意味で網羅的に、様々な意味記述を割り振ってきた。これらの、様相助動詞の多様な意味を本論のモデルはどのように扱ってゆくのか、ということは、当然問題とされるだろう。

例えば、“können”の意味の一つとして「能力」、”dürfen”の意味の一つとして「許可」が挙げられるが、このような意味はいったい可能様相とどんなかかわりがあるのだろうか。その答として、このような意味は、それぞれのコンテキストにおける「可能様相」が「動作主の行為」にかかわる際の解釈、として理解されるのだろうかと私は考えている。つまり、「動作主の行為」が可能であるならば、これは「知識」の問題として、動作主にその「能力」が備わっているということが理解されるし、「意志」の問題としては、動作主にそのことが「許可」されているということが理解されるとか、そんな考えである。

更には、「知的」、「心的」というような分類をされてきた様相助動詞の意味についても、私の提案した、いくつかのコンテキストにおける可能様相と必然様相としての様相助動詞の意味と、言語使用のコンテキストとの相互関係から導き出せるだろうと考えている。

4. 3. 今後の研究の見通しについて

これまで、私の計画する「ドイツ語の様相助動詞の意味研究」について、その構想の概略を述べてきた。現在とりかかったばかりの研究であるから、当然、様々な問題が山積みであり、片付けなくてはならない作業がまた、たくさんある。

ここでは、私は、本論でふれたいくつかの問題や課題について、今後どのように処理してゆけるのかの見通しを述べたい。

まず、様相助動詞を用いた表現の間の推論関係の調査であるが、これは、多種多様な表現について、ネイティブスピーカーに対するアンケート調査を行い、データを収集整理してゆかなくてはならないだろう。本来、言語研究を進めていくためには、直接の言語資料よりも、様々な角度からの、ネイティブスピーカーの言語直観に基づく、その資料についての判断例の収集に重きが置かれるべきだと、私は考える。このようなデータについて計算機処理することによって、私の仮説に対して、実証的な検討を加えてゆこうと思っている。

つぎに、“können”と”sollen”, ”mögen”と”müssen”, それに”dürfen”と”wollen”のそれぞれの様相助動詞の対が、それぞれコンテキスト W^k , W^p , W^l にかかわっていると私は考えるのだが、これらの各対の様相助動詞が、確信できるだけの数の具体的な言語事実によって特徴づけられるのか、という問題である。

わたしの仮説が正しいとして、十分に豊富なドイツ語のテキストデータベースが与えられるならば、計算機処理をほどこして、これらの様相助動詞のそれぞれについて、様々な言語表現との共起関係が統計的な数値として取りだせる筈である。つまり、ある言語表現とある様相助動詞の共起する割合が有意的に高いならば、その共起関係は、当該の様相助動詞と、その言語表現の双方を特徴づけていることになる。もし、このような仕方でも、それぞれの対の様相助動詞が特徴づけできるならば、その特徴づけにより、それぞれのコンテキスト W^k , W^p , W^l の特性を考える

のは、(ピンク色にせよ、灰白色にせよ)我々人間の脳味噌の仕事である。

(私の考えている方向とはいささか異なるが、テキストデータベースに基づいた英語の様相助動詞についての研究には Coates 1983 がある。)

4. 4. 最後に

言語理論に課せられたおおきな要請の1つは、「言語事実を最小限の道具立てによって、最大限に記述し尽くす」ということであろう。このことは、単に、言語記述である文法体系の生成力の大きさの問題というのではない。このことは、1つには、(当然のことではあるが、)文法体系からできる限り言語外的なことがらを除外してゆこうということである。もう1つには、文法体系と言語外的なことがらをつかさどる緒体系(言語使用の体系、認知的な能力にかかわる体系、その他)との相互関係をしっかりと押えてゆこうということである。

様相助動詞についていえば、一方では、その言語現象は限りなく豊富である。他方には、様相論理という、簡潔で整った体系がある。この双方を結び付けようというのが、私のそもそものねらいである。

様相助動詞の体系が様相論理体系のうえになりたっている、というようなぼんやりとした「感じ」はあるのだが、多様な言語事実のまゝに、その体系の姿はかすんでいる。しかし、その多様な言語事実を、その多様さに応じて、豊富なデータを収集、整理すること。更に、言語外的なことがらを、言語外的な、例えば言語使用の、体系として、文法体系の外側に整理すること。そして更には、文法体系と言語外的な諸体系の間関係を整理すること。これらの作業を積み重ねてゆくことにより、この、ドイツ語様相助動詞の文法体系の形ははっきりとみえてくるだろう。

その時に私の仮説が裏づけられるにしても、または、更改を必要とされるにしても、それは有意義なことであると私は考える。

文献

- Coates J. The Semantics of the Modal Auxiliaries. London: Groom Helm.
 Cresswell, M. & Hughes, G.E. 1968. Introduction to Modallogic. London: Methuen.
 Kratzer, A. 1976. "Was können und müssen bedeuten können müssen." in: Linguistische Berichte 42, 1-28.
 Lyons, J. 1977. Semantics. Cambridge: Cambridge University Press.
 Vater, H. 1975. "Werden als Modalverb." in: Calbert, J.P. und Vater, H., Aspekte der Modalität.
 Tübingen: Narr, S.71-148.

Zusammenfassung

Ich plane ein Forschungsvorhaben mit dem Titel: "Eine semantische Beschreibung der deutschen Modalverben".

In der vorliegenden Arbeit habe ich kurz dargestellt, was ich bei meinem Forschungsprojekt voraussetze, was für ein Ergebnis ich erwarte, und welchen Arbeitsprozeß ich wähle.

Meine These heißt:

das Bedeutungssystem der deutschen Modalverben baut sich auf dem System der Standardmodallogik auf, und zwar folgenderweise. Die Bedeutungen der Modalverben "können" und "sollen", "mögen" und "müssen", und "dürfen" und "wollen" sind die Möglichkeits- und Notwendigkeitsmodalitäten jeweils zu den Kontexten "Kenntnisse", "Präferenzen" und "Intentionen".

Ich will diese These dadurch begründen, indem ich folgende Tatsachen zeige:

Die Modalverben verhalten sich einander, ähnlich wie die Modaloperatoren der Modallogik.

Zwischen den jeweiligen Paarungen der Modalverben bestehen ziemlich systematische logische Beziehungen.

Jede Paarung wird durch deren sprachliches Verhalten charakterisiert.

Um dieses Unternehmen zu verwirklichen, werde ich die sprachlichen Daten, mit der Beurteilungen der nativ speakers, sammeln. Durch maschinelle Verarbeitung der gesammelten Daten läßt sich hoffentlich zeigen, ob mein Vorschlag tatsächlich begründbar ist.

Außerdem wird versucht, die reichen Bedeutungsvariationen der Modalverben, und die Phänomene, die mit meinem Vorschlag nicht so einfach zusammenfallen, durch die Interaktionen des grammatischen Systems und den außersprachlichen Systemen zu erklären.